持続的な交流の創造

ＪＴＢ交流文化賞　受賞地域のいま―2015

――第10回（2014年度）最優秀賞

小原ＥＣＯプロジェクト

集落人口２人!!　限界集落の挑戦

福井県勝山市小原集落は豊かな自然に恵まれた山村。かつては林業や炭焼きなどが盛んで、1891年には93戸の家屋（535人が居住）が存在していたが、山間の豪雪地帯のため近年急速に過疎化が進み、現在は15戸の家屋が残り、現住は１戸のみ。集落や森林経営の崩壊の危機に瀕している。

小原ＥＣＯプロジェクトは、古民家を修復した農家民宿を交流拠点に、地元大学・周辺住民らと観光振興に取り組んでいる。交流人口年間1200人以上を目標に、農村文化、動植物の生態系、地形などを資源とした多様なエコツアーを提供している。近い将来に住民が存在しなくても地域文化や自然環境を未来に残すことを目指す。

賞の選考では「たった２人（受賞時）の住民でもこれだけのことができるという、未来への可能性を感じさせる。前向きに、力まず、粛々と継続して取り組んでいる姿に勇気づけられる」などと高く評価された。

今の小原集落には中央の１軒に１人だけが生活をしている

「ＪＴＢ交流文化賞」は、地域に根ざした持続的な交流の創造と、各地域の魅力の創出、地域の活性化に寄与することを目的に2005年創設された。発展の可能性のある「持続可能な観光」を応援するというのがこの賞の特徴で、受賞した団体の取り組みに対してはＪＴＢがさまざまな形で協力する。第10回最優秀賞の小原ＥＣＯプロジェクト（福井県勝山市）の「集落人口２人!!　限界集落の挑戦」も今、ＪＴＢとの連携が進んでいる。

小原ＥＣＯプロジェクトは、小原集落の地域文化や自然環境を将来に残すことを目的として2006年に設立され、多様なエコツアーによる交流を通じて、観光・地域振興、環境保全に取り組んできた。具体的には、プロジェクト組織になる以前の05年から地域の自然を活用したエコツアーを実施し、06年から交流の拠点となる古民家の再生をスタート、08年から保全活動も実施している。

このように地道ながら活発な活動を展開してきた小原ＥＣＯプロジェクトだが、これまでＪＴＢとの関わりは皆無だった。ＪＴＢと連携した取り組みが始まったのは、昨年1月に第10回ＪＴＢ交流文化賞の最優秀賞を受賞したのがきっかけだ。

増える視察、積極的に協力

子供たちに環境教育の場を提供

それからわずか1年だが、実績が出ている。社会活動「ＪＴＢ地球いきいきプロジェクト」のプログラムに小原地区での茶畑再生などが組み込まれ、昨年10月に「勝山ジオパーク&小原ＥＣＯプロジェクトで学ぶ地球の物語」として実施された。ＪＴＢの観光情報ガイドブック「るるぶ」にも小原地区が取り上げられる。また、福井県観光連盟の観光プロデューサーがＪＴＢからの出向者であったため、県が発行する観光情報パンフレットにも掲載されている。

ＪＴＢ交流文化賞の受賞で小原ＥＣＯプロジェクトの名前と活動が広く知られ、ＪＴＢ以外からも注目を集めた。福井県や近県の旅行会社からツアー化の商談が数多く寄せられている。

地元の福井工業大学による古民家再生活動

地元の「えちぜん鉄道」とは以前から着地型旅行を共同で商品化する構想があったが、賞の受賞後、具体的に話が進み始めた。その着地型ツアーの内容は、小原地区の環境保全活動に勝山の祭りなど地元の文化を組み込んだ形にする方向でまとまりつつある。

ジオパーク構想を推し進めている勝山市からは、小原地区の活動をジオツアーとして売り出したいと要望されている。

ＪＴＢをはじめとする旅行会社などによるエコツアーの催行は、収益の部分。経済的な面を成り立たせなければ、活動を継続していけない。もう一つが、「参加した人たちに食文化を伝える。一方、伝えるためには私たちも勉強しなければならない。私たちの活動がさらにレベルアップしていける」と小原ＥＣＯプロジェクト代表の國吉一實氏は語る。その結果、「伝統が受け継がれ、残っていく」。

ＪＴＢ交流文化賞を受賞したことでの一番の反響は、全国の自治体や団体による視察だ。農林水産省のホームページでも「元住民による地域資源の保全管理や資源を活用したエコツーリズム等の取り組み」事例として小原ＥＣＯプロジェクトの取り組みが紹介されているため、視察者への地域活性化のアドバイスとして「ＪＴＢと関わるメリットも話していきたい」と言う。

視察の数は増加。受賞の反響が見て取れるという。

最優秀賞に選ばれた評価のポイントの一つが、「限界集落の存続を周辺都市、住民が参加し取り組む点で全国のモデルとなる」こと。他の地域への波及効果が期待されている。國吉氏は「視察の問い合わせがかなり多いので、私たちも最近になってそれを意識するようになった。限界集落の地域はどこも悩んでいるのではないか。視察の受け入れがそうした地域のためになるのであれば、いくらでも協力する」と協力を惜しまない。また、視察者への地域活性化のアドバイスとして「ＪＴＢと関わるメリットも話していきたい」と言う。

受賞によって小原ＥＣＯプロジェクトの存在を知り得たわけではないが、受賞した昨年1月以降、

交流文化賞受賞の声

小原ＥＣＯプロジェクト代表　國吉氏

評価されることが目標に

小原ＥＣＯプロジェクトは、小原集落の出身者の人と集落とあまり関わりのない人とが一緒に活動している。これがうまく機能しているのは、この地域、自然を残したいという目指す将来像がはっきりしていて、かつ、みんなでそれを共有できていたためだ。

ＪＴＢ交流文化賞も、ここで評価されることが一つの目標になる。ぜひ、他の地域にも応募を勧めたい。受賞して多くの人に自分たちの活動を知ってもらえれば、今後の励みにもなる。

ＪＴＢ交流文化賞選考委員が視察

ＪＴＢ交流文化賞は、観光や交流、地域活性などに造詣の深い選考委員６人が厳正に審査し、各賞を決定する。昨年10月22日、その選考委員である松平定知、見城美枝子、森まゆみ、久保田穣の４氏が小原を訪れ、小原ＥＣＯプロジェクトの活動現場を視察してきた。自分の目で見て、肌で感じた現地を４氏が語った。

國吉氏の案内で小原ＥＣＯプロジェクトの活動現場を見て回る選考委員たち

季節限定ではもったいない

松平定知氏

小原地区のたった1人の居住者を、周りの皆さんが大切にケアする一方で、「このこと」を逆手に取った國吉さんたちの「住んでいるのは一人なんだから、空き家はあるぜ。この空き家を、大工さんや学生たちの実地訓練の教材にしよう」という発想に感激した。

清澄な空気、清冽な水は小原地区の財産だから、その立地を生かした、新鮮な山菜料理の提供と併行して展開されるこの取り組みを、なんとか、通年事業に発展できないかと思う。

（京都造形芸術大学客員教授、国学院大学客員教授）

柔軟な発想で集落づくり

見城美枝子氏

秋晴れの小原集落は紅葉が始まり、空気は澄んで静かな時間が流れていた。2人から1人へ。集落が消えようとする寸前、活動を開始した國吉さんが案内くださる小原集落は本当に山の中。家はその山肌に背面をつけるように建っていて、入居者を待っていた。

「まずはトイレから」と國吉さんが公衆トイレを見せてくださる。水洗い。清潔。もちろん、清流を汚さない設備、ただし、電気をほぼここで使ってしまうとか。でも、町の暮らしから入ってくる人にとって、水洗トイレは重要課題。山の食材を使った幕の内風の昼食は、知らない食材が何種類も入っていて、地産地消のごちそう。不便だから我慢せよ、ではなく、國吉さんは小原の自然を生かしながら暮らしのアイテムは今日風に、と柔軟な発想で新たな集落づくりに取り組んでいる。山暮らしの再生に関わる人材として最適であったと思う。おみやげに頂戴した清流のわさび、逸品でした。

（青森大学副学長・教授、エッセイスト、ジャーナリスト）

こんなところで過ごせたら

森まゆみ氏

住民が1人になってしまった集落を見捨てるのでなく、都会の人々のリフレッシュの場、また大学と連携して建築学科の修復やリノベーションの現場として活用するという考え方が斬新で面白い。現地を視察し、自分も夏の間、こんなところで1、2週間過ごせたらいいなあと思った。

電気はつくが、水道はないとのことで、そういう暮らしをむしろ体験したいと思っている人が都会にはたくさんいる。水を沢や井戸から汲む、いろりの日を楽しむ、静かさを楽しむ、いい空気や満天の星を楽しむ、それこそが都会人が日常の中で得られないもので、これは観光や交流の目玉になりうると感じた。紅葉もたいへん美しく、また頂いたお弁当もおいしかった。手作りの里芋の煮転がしは他では味わえない印象に残る味だった。

小水力発電によるウォシュレットつき水洗トイレにも驚いた。

これからも1人の住民を大事に、林業で現場にいる人々も連携して、小原を残し活用してほしい。風景は100年、風土は千年単位で考えるべきである。ごちそうさまでした。

（作家、谷根千工房主宰）

本来の地方創生がここに

久保田穣氏

いわゆる、観光地ではないところを訪問する、その理由はたくさんあるが、この小原地区は独特だ。

ここにあるのは日本のどこにでも見られる、山林、おいしい空気ときれいな川の水、そして高齢男性1人の限界集落だ。

この限界集落が交流文化のフィールド、触媒や役割を学ぶ、こんなところはどこにもないのでは、と思わせる。

一見、昨今の地域経済効果を重視する観光政策の対極のように見えるが、ここで交流し学んだ人材が活躍してくれる、これが本来の地方創生と感じた小原視察だった。

この質の高い取り組みが継続されることを願う。

（ＪＴＢ常務取締役）

「小原ＥＣＯプロジェクト」のリーダー國吉さん、感と言えばよいのだろう。

建築学科の学生らが実地で古民家再生に従事しつつ、森林組合長でもある國吉さんから森の生態

「ＪＴＢ地球いきいきプロジェクト」でも実施

茶畑植樹や集落散歩

茶畑再生のための植樹

草木を見ながら散策

「ＪＴＢ地球いきいきプロジェクト」は、地域の環境保全活動に歴史や文化、観光素材に触れる機会を盛り込んだＪＴＢグループならではの社会活動だ。自治体やＮＰＯ法人などと連携し、全国各地で実施している。

昨年10月25日には「勝山ジオパーク&小原ＥＣＯプロジェクトで学ぶ地球の物語」をテーマに福井県勝山市で活動した。午前は大矢谷白山神社で数万年前の岩屑なだれで運ばれてきた巨大な岩塊を見学した後、崩壊した火山の姿を遠望。午後は小原地区で茶畑再生のための茶苗植樹と茶煎り&集落を散策しながら、採った笹を使って笹ずしを作った。「はたや記念館ゆめおーれ勝山」で繭玉クラフト制作も体験した。

参加者からは「参加代金無料ということで気軽に参加したが、内容が充実していて大変満足した」「1人しか住んでいない集落を皆で支えていることに感動した」といった声が聞かれた。

JTB　感動のそばに、いつも。

人をつなぐ、笑顔をつなぐ。
JTBは地球を舞台に、
あらゆる交流を創造し続けます。